

とかす力（八木重吉の詩を愛好する会会報）

事務局（連絡先）〒277-0014 千葉県柏市東 3-8-34 柏第一宣教バプテスト教会

*****天利武人（教会牧師）電話 04-7164-9159

（会報編集、ホームページの連絡先）〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継

***** Eメール kmat27aiko@gmail.com 携帯電話 09061674553

☆ 第 14 号

☆2017年(平成29年)

10月5日 発行

★2017年の茶の花忌について

今年の1月に八木重吉生家の当主である八木藤雄様が逝去されて、今年の茶の花忌はどうなるのだろうかと思われていた愛好者の皆様、八木重吉記念館が昨年の町田市民文学館での八木重吉展開催に伴う資料の移動とその後の返却に時間がかかり閉館されているままの状況で、いつ再開されるのだろうかと思われていた愛好者の皆様、現在わかる範囲での状況をお知らせいたします。

今年も茶の花忌は開催されます。ただ墓前礼拝中心の催しになります。毎年、墓前礼拝の後、生家の庭に移動してゲストによるお話や重吉詩の歌唱等、時間をかけての催しがありましたが、それに伴う生家のご家族や親戚、地域の皆様のご苦勞は、かなり大変なものでした。ある年は大雨の中の開催で、ブルーシートを客席の上に設置するのに苦勞した年もありました。日常、記念館の訪問者を接待する中での茶の花忌ということで、今後も長く記念館の開館と茶の花忌の催しを続けていくためには、あまり負担のかからない茶の花忌にしたいと、数年前から話が出ていました。最近お聞きしたところでは、短くお話や歌唱が入れられるかもしれないと、参加者の為に努力して下さっている様子をお聞きしましたが、八木重吉愛好者の一人として、今後は愛好者たちが生家に協力していく体制が必要だと思っています。都市化し始めているとはいえ、まだ豊かな緑とかつての農村共同体の雰囲気が残る地域の人々とも連携して、生家に負担をかけない茶の花忌を模索して相談をしているところです。

記念館につきましては、昨年の八木重吉展で大掛かりな移動や展示の入れ替えをしましたので、元の形に戻すことだけでも大変ですが、展示するものと、展示はできないけどきちんと保存しておくべきものの整理など、スペースが限られている小さな記念館なので、とても時間がかかっています。しかし生家では、茶の花忌当日にはなんとか参加者が見られる形にしたいと努力してくれています。



生家の庭にある八木重吉の胸像

★一般庶民に愛され続ける八木重吉の現状紹介

わずか 29 歳の生涯、しかも家族中心に孤独に詩を書いていた八木重吉なので、どうしても地味なイメージですが、その詩はじんわり人の心を惹きつけています。いろいろな人々が、それぞれの愛好の仕方でも重吉の詩を取り上げ、共感し、感想を寄せています。インターネットのホームページで見られるもの以外のもので、情報として得ているものを次に紹介しておきます。

1) いのちのことば社が『百万人の福音』9月号で八木重吉特集、『フォレストブックス』シリーズで八木重吉が近刊

1991年（平成3年）に『百万人の福音』スペシャルとして、八木重吉だけの大特集が組まれましたが、今年の9月号で冒頭の18ページにわたって八木重吉特集が組まれました。またクリスチャンでない人にも気軽に読んでもらえるような書籍として刊行してきている『フォレストブックス』として、八木重吉の詩を愛好する会の活動を軸とした八木重吉の書籍を刊行したいということで、8月にいのちのことば社の女性スタッフが事務局の天利武人牧師を訪問し、取材していきました。近刊予定です。

2) キリスト新聞社の取材と書籍刊行予定 事務局で取材スタッフと→

いのちのことば社の取材スタッフが来られた8月には、事務局の天利武人



牧師を訪ねて、キリスト新聞社の取材スタッフも来られました。キリスト新聞社は、八木重吉詩撰集『祈りの道』を刊行したばかりで、さらに「八木重吉と旅をする」というような題で本を作るために、天利牧師に取材に来ました。折しも、いのちのことば社の取材スタッフも来た日でしたので、二人のスタッフの要望に応じて柏の詩碑や重吉旧居跡付近を案内してあげることができました。

3) 八木重吉展に来られた方々の感想紹介（町田市民文学館の報告より引用）

昨年の町田市民文学館での八木重吉展は、非常に好評でした。文学館がアンケート結果をまとめていますが、そこに記された感想の多くは、八木重吉の詩に共感し、また展覧会で時代別に整理された資料や解説を見て感動したという内容でした。60～80代の愛好者たちは、たいいて若い時代に重吉に出会い、ずっと愛好してきているようです。平易な日常のことばで親しみやすいということから読み始め、そのズバリ言い切る表現や深い求道のことに共感し、一生の愛読詩になっているのです。感想をいくつか引用しておきます。

高校時代、国語の先生が八木重吉の詩を、黒板いっぱい大きな字で書いて紹介してくださり、心に残っています。時々、詩集を出して読んでいます。 / 高1の時、塾の先生に私の詩が重吉に似ているので読んでごらんとされたのがきっかけで、言葉に出来ずにいた私の心の芯をぐとつかまれたような衝撃でした。 / 15歳で初めて重吉を知り、72歳の今までほとんどすべての作品を読んできました。 / 18歳の時に八木重吉の詩に出会いました。その後哀しい時、悩んだ時に必ず詩集を手にして支えられてきました。 / 今の私の辛さに寄り添うように、詩がしみ込んできて癒してくれるようでした。 / 多くの資料が残っていて大変驚きました。“ことば”の重みと豊かさを感じました。

4) 新声会合唱団第52回演奏会で重吉詩の合唱

5月20日（土）渋谷区文化総合センター大和田さくらホールで新声会合唱団による演奏が有り、その中で八木重吉による5つの小品『秋』と題して、「霧がふる」「木」「ちいさいふくろ」「白い雲」「終曲」の5曲と加えて「夕焼」がうたわれました。案内を下されたピアノ演奏者及川芳子さんのきれいなピアノと高齢にもかかわらず情熱的に指揮をされた作曲家柳川直則さんに感動でした。茅ヶ崎の吉村さん。太田さん、平塚の倉持さんが参加されました。詩碑になっている有名な「夕焼」を除く5つの詩を紹介しておきます。

霧がふる

霧が ふる／きりが ふる／あさが しづもる／きりがふる （『秋の瞳』）

木

はつきりと／もう秋だなおもふころは／色々なものが好きになってくる／あかるい日なぞ／
大きな木のそばへ行ってゐたいきがする （『貧しき信徒』）

ちいさい ふくろ

これは ちいさい ふくろ／ねんねこ おんぶのとき／せなかに たらす 赤いふくろ／
まつしろな 絹のひもがついてゐます／けさは／しなやかな 秋／ごらんなさい／
机のうへに 金糸のぬいとりもはいった 赤いふくろがおいてある （『秋の瞳』）

白い雲

秋の いちじるしさは／空の 碧を つんざいて 横にながれた白い雲だ／なにを かたつてゐるのか／
それはわからないが／りんりと かなしい しづかな雲だ （『秋の瞳』）

終曲<重吉の詩は無題ですが、コンサートの流れに合わせて「終曲」と題を付けてありました。>

しらじらと／みづのない川をみあげてゆけば／そのはてにそびえたつ／はつふゆの山／
かるくりりしいあをぞらのむねにやすらふ （重吉詩稿「寂寥三昧」）

5) NHKのテレビ番組の中でしばしば引用される重吉の詩

- ・2004年の朝ドラ「天花」の中で八木重吉の詩（「花がふってくると思う」「光」等）が引用されていました。
- ・2014年のBS「昨日のカレー明日のパン」の中で少女がくちずさむ詩が重吉の「うつくしいもの」でした。
- ・Eテレの午後5：00からの番組「にほんごであそぼ」で、たびたびいろいろな八木重吉の詩がとりあげら

れてきています。最近では、愛好者が多い「草にすわる」がとりあげられました。

わたしの まちが良かった／わたしのまちが良かった／こうして 草にすわれれば それがわかる

6) 地域新聞の記事(柏、松戸)の紹介

柏の自然を愛した、こころ美しき詩人

八木重吉 じゅうきち

明治31(1898)年～昭和2(1927)年 29歳没

東京府南多摩郡堺村相原(現東京都町田市)に生まれ、大正14(1925)年に開校したばかりの東葛飾中学校(現東葛飾高校)に赴任。柏の自然を愛し、純粋でひたむきなその詩は、多くの人々の心を捉えた。しかし、同校に赴任してわずか3年後、結核により29歳で短い生涯を終える。



八木重吉記念館所蔵

広報「かしわ」

2016.8.15.

柏 への着任時、喜びに満ちた心情を次のように書き留めています。
 「いよいよこっちへやって来ました。桐の疎林と、松の密林とがある。原がある。竹林がある。麦畑がある。菜畑がある。巨きな沼がある。はてしない空がある。はてしない想いがある」(『書簡』・『八木重吉全集』)

重 吉は、特に柏の自然を愛し、これを素材にたくさんの詩を創作していきました。柏の自然に触れることで、言葉がわき上がるように素朴な詩を生みだしていったのです。

学 生時代から詩に打ち込んでいた重吉は、英語教師として教壇に立つ傍らで、さまざまな詩を詠み、その詩を新聞や雑誌などに投稿していました。こうして積み重ねた詩を整理し、詩集「秋の瞳」を出版します。重吉の生徒の中には、自らこの詩集を購入する者もあり、生徒からは尊敬心を持たれていたことがうかがえます。

ひ たむきで平穏な教員生活を送っていた重吉でしたが、大正15(1926)年に不幸にして重い病魔に襲われます。闘病生活の末、昭和2(1927)年10月26日に眠るように息を引き取りました。柏の自然を愛した重吉の詩は、多くの人に読み継がれ、今も時代を超えて生きているのです。

原っぱ
 ずいぶん ひろい 原っぱだ
 いっぱんのみちを むしように あるいてゆく
 こころが うつくしくなって
 ひとりごとをいうのが うれしくなる

この詩は、柏市ゆかりの詩人、八木重吉が詠んだもので、かつて勤務していた東葛飾高校に詩碑が建てられています。彼は分かりやすい言葉を用いた短い詩で、人間の心の奥にある思いを率直に表現する詩人でした。その純粋で一途(いちず)な魂の言葉が人々の共感を呼んだのです。



▲東葛飾高校に建てられた詩碑

松戸の地域新聞「ウキウキ」 2017.8.4

原っぱ
 ずいぶん
 ひろい原っぱだ
 いっぱんのみちを
 むしように
 あるいてゆく
 こころが
 うつくしくなって
 ひとりごとをいうのが
 うれしくなる

大正末期から昭和初期にかけて多くの作品を残し、29歳で早逝した詩人八木重吉。東葛飾高校敷地の一角、国道6号線歩道ぎわに「原っぱ」と題する重吉の詩を刻んだ石碑が建っています。

石碑めぐり 122

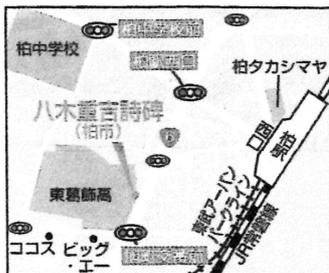
八木重吉詩碑 (柏市)

東葛飾中学校(現東葛飾高校)の英語教師として赴任したのは大正14年。敬虔なクリスチャンだった重吉の真つ直ぐな視線は主に柏の豊かな自然物に注がれ2000編もの作品が生まれました。しかし、翌15年3月には結核と診断され、療養のため柏を去ることになりました。柏在住の1年間、重吉の詩作がもつとも旺盛な時期だったようです。

詩碑は高校敷地のフェンスを一部えぐるように作ったスペースに設置され、道行く人がいつでも見ることが出来ます。詩碑脇に立つ説明版によると、重吉が専らした職員住宅の前は3万坪の原っぱだったとか。この辺りは江戸幕府の軍馬の放牧場小金牧を構成する上野牧(かみのまき)の一部。明治に入り開墾が進みましたが、広大な原野は残っていたのです。学校近くの旧居跡付近を訪れてみました。当時の面影は忍ぶべくもありませんが、「原っぱ」を口ずさんながら目を閉じると、重吉の愛した柏の自然が脳裏に浮かぶようでした。(Nono)

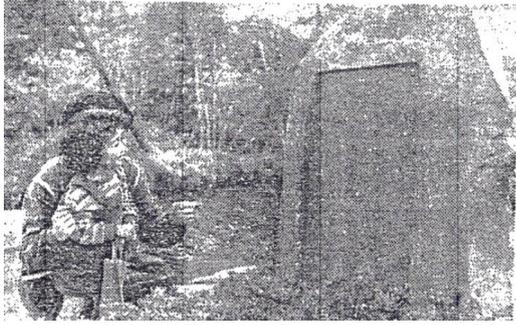


家族との原っぱ散策も詩作の原動力



◎所在地／
 柏市旭町3・2・1
 ●参考資料／「八木重吉の詩を愛する会」編
 「柏時代の詩人八木重吉」

★もう一つの「素朴な琴」の建立年判明



小山田団地に設置された八木重吉詩碑—町田市で

町田の丘陵地に建てられた「ンター」地区に詩人・八木重吉の公団「小山田桜台団地」のセー（町田出）の詩碑が建てられた。

公団がいきな試み

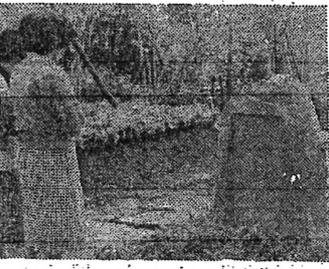
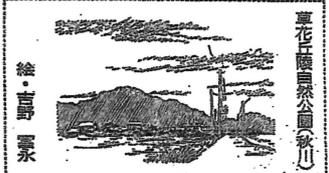
町田の小山田団地 詩人・八木重吉の詩碑

公団が歌碑をつつたのは初めての試み。桜台地区のイメージに合った「ンター」地区の根府川石。「この明あきのなかに、この葉かなをのびけ、秋の美しさを詠へかね、春はじけに響いたすだら」(桑村翁)と刻まれてゐる。団地「ンター」側の植え込みが、びびなく設けられ、大げさな除幕式もなかった。

遺跡調査で見つけた遺構を公園に残したり、千五百年の桜の移植を行うなど公団が力を入れる「ンター」団地。この詩碑づくりも、そんな発想から実現したといふ。

生家にある詩碑「素朴な琴」と同じ詩碑が、同じ町田市内の小山田桜台集会所脇にあります。詩碑に建立年が記されていない事から、詩碑「ねがひ」と同じ頃であろうと推測して、平成6年頃と推測してきましたが、町田市民文学館から建立年に発行された新聞記事が提供され、建立年はもっと古く1984年(昭和59年)の5月であることが判明しました。

小山田桜台団地を造った住宅・都市整備公団が、団地のイメージに合うこの詩を選んで、高さ1メートル20センチの根府川石で建立したものです。昭和59年は、八木重吉記念館が10月に開館する年です。町田に八木重吉の理解が進展していく時期であり、公団関係者に八木重吉の詩や相原地域の詩碑を知る者がいたのかもしれませんが、標準的な楷書で刻まれた詩碑で、大きな除幕式行事もなかったようですが、公団が造ったという珍しい詩碑です。当時の新聞記事を紹介しておきます。



団地に建てられた八木重吉の詩碑

町田の丘陵地に建てられた「ンター」地区に詩人・八木重吉の公団「小山田桜台団地」のセー（町田出）の詩碑が建てられた。この詩碑は、この明あきのなかに、この葉かなをのびけ、秋の美しさを詠へかね、春はじけに響いたすだら(桑村翁)と刻まれてゐる。団地「ンター」側の植え込みが、びびなく設けられ、大げさな除幕式もなかった。

多摩読賣

八王子支局 〒192 八王子市本町24-8 電話(代) 0426-22-7161 立川支局

現在の詩碑の様子



★ あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中
皆さんの、愛する重吉に対する思いを原稿にしてください。今回第3集をお届けします。第4集に向けて作成を目指しています。どうぞ奮って原稿をお寄せ下さい。
(募集) 題：「八木重吉との出会いとその詩の魅力」(この内容に沿うなら別のタイトルでもOKです。)
字数：2000字程度(原稿用紙5枚程度、パソコンのワード歓迎)

締切：なし（随時お送りください）

送り先：メール（ kmat27aiko@gmail.com へ）か

郵送で 〒270-1406 千葉県 白井市 中205 小林正継 へ

★八木重吉の詩を愛好する会ホームページ案内

ホームページアドレス <http://www.yagijuaiko.com/> （作成途中の部分があることをご了解下さい）

Eメールアドレス kmat27aiko@gmail.com （管理者小林正継）